BUBENÍČEK

NEW YEAR GALA

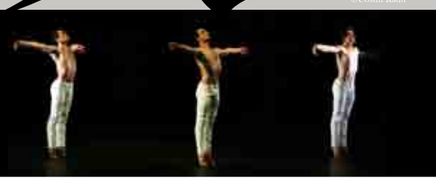
Canon

ブベニチェク・ニューイヤーガラ

カノン

ブベニチェク・ニューイヤーガラ

BUBENÍČEK カノン



NEW YEAR GALA

Canon

2013 1/5(土)19:00 6(日)15:00 7(月)19:00

Bunkamura オーチャードホール

主催 Bunkamura／TBS　協賛 高砂熱学工業株式会社 Takasago Thermal Engineering Co.,Ltd.

企画協力 ベルチェアソシエイツ　オフィシャルエアライン ANA

「ル・スフル・ドゥ・レスプリ―魂のため息―」彩の国さいたま芸術劇場公演より　©池上直哉

Greetings from Producers

ご挨拶

本日は「ブベニチェク・ニューイヤーガラ～カノン～」にご来場いただき、誠に有難うございます。

この度、振付家として活躍がめざましい、ドレスデン・バレエ プリンシパル、イリ・ブベニチェクの作品で構成した公演を日本で初めて開催するはこびとなりました。

本公演は、Bunkamuraプロデュース公演「エトワール・ガラ」の縁に始まり、ブベニチェクが兄・オットーと共に何年もの間構想を温めてきたものです。音楽性豊かで、詩情溢れる作品に定評があるブベニチェクは、キリアン、フォーサイス、ノイマイヤーをはじめとする巨匠振付家に続き、次世代のバレエを率いる振付家の一人として大きな注目を集めております。今回は、そのブベニチェク作品の魅力を存分にご堪能いただける演目が並びました。これまでのバレエ・ガラとは一線を画したプログラム、そして、ヨーロッパの俊英ダンサー達が贈る“新時代のバレエ”は、新年の幕開けを華やかに飾ってくれることでしょう。

上演作品のうち、『牧神』、『ドリアン・グレイの肖像』、『トッカータ』の3作品は、ヨーロッパやアメリカで高い評価を得て、今回が待望の日本初演となります。また、「エトワール・ガラ」で上演して以来再演を求める声がやまない『カノン』を、本公演ではフル・バージョン（『ル・スフル・ドゥ・レスプリ―魂のため息―』）でお届けいたします。そして、今回の一番の見どころは、本公演のために振り付けられ、パリ・オペラ座エトワールのドロテ・ジルベールとエルヴェ・モローが出演する『プレリュードとフーガ』です。オペラ座で一際輝く若手エトワールのジルベール、長いブランクから完全復帰し、約7年ぶりの来日となるモローが魅せる世界初演作品に、どうぞご期待ください。

最後に、協賛を賜りました高砂熱学工業株式会社様に厚く御礼を申し上げるとともに、本公演開催に際し、ご尽力いただきましたすべての皆様に心から感謝を申し上げます。

そして、本年が皆様にとりまして喜びに満ち溢れた年となりますことを心よりお祈りし、御挨拶とさせていただきます。

主催者

©Rebecca Hopp

from Jiří & Otto Bubeníček

東京の美しいBunkamuraオーチャードホールで、私と双子の兄オットーの創作活動の軌跡とコラボレーションを初めてご覧いただく「ブベニチェク・ニューイヤーガラ〜カノン〜」を上演できることを、大変光栄に思っています。これまでにプラハ国民劇場、ローマのCentro Artistico Calturale Amici Della Danza、彩の国さいたま芸術劇場をはじめとする劇場や、チェコのルネサンス時代の荘厳な城の野外など、多くの都市で我々のガラ公演を行ってきましたが、このたび日本で披露するのは世界で初めてとなるプログラムです。

本公演は、異なる動きのスタイルや鮮やかな色彩、均衡のとれた美術デザイン、強烈な感情のほとばしり、詩情豊かな音楽——これらすべてに加え、世界のバレエシーンで活躍する最高峰のダンサーが集って贈るという、特別な企画。ドレスデン・バレエ、ハンブルク・バレエ、そしてパリ・オペラ座バレエの卓越したダンサーに私が振り付け、そして兄オットーが衣裳、美術デザイン、作曲・音楽監修を手掛けた5つの作品をお届けいたします。

他では決して観ることができないこの公演を、ぜひお楽しみください。

———— イリ・ブベニチェク

踊るとき わたしはその踊りになり
作曲するとき わたしはその音楽になり
創るとき わたしは創り手となって
この上ない幸せに包まれ 生命を謳歌する
弟との創作は 我々の身体を通りぬけ
思考を通りぬけ
魂を通りぬけていく“生”そのもの
喜びと愛の大きな力なのだ

———— オットー・ブベニチェク

Canon

Program

NEW YEAR GALA

「ル・スフル・ドゥ・レスプリ―魂のため息―」彩の国さいたま芸術劇場公演より　©池上直哉

「トッカータ」 日本初演

“イローナに捧げる”

世界初演: 2009年5月13日　ニューヨーク・シティ・バレエ

振付: イリ・ブベニチェク
音楽・衣裳: オットー・ブベニチェク
照明: ファビオ・アントーチ、イリ・ブベニチェク

出演: ドロテ・ジルベール、カテリーナ・マルコフスカヤ、アンナ・メルクロヴァ
エルヴェ・モロー、ヨン・ヴァイエホ、クラウディオ・カンジアロッシ、マイケル・タッカー

TOCCATA Japan Premiere

“To Ilona”

Created for New York City Ballet, May 13, 2009

Choreography: Jiří Bubeníček
Music: Otto Bubeníček
Costumes: Otto Bubeníček
Lighting: Fabio Antoci and Jiří Bubeníček

Cast: Dorothée Gilbert, Katherina Markowskaja, Anna Merkulova
Hervé Moreau, Jón Vallejo, Claudio Cangialosi, Michael Tucker

「ドリアン・グレイの肖像」 日本初演

“オットー・ベルティスに捧げる”

世界初演: 2011年7月16日　ヴェルケー・ロシニ城（チェコ共和国）にて

振付: イリ・ブベニチェク、オットー・ブベニチェク
音楽: キース・ジャレット「1988年10月17日」「風」
ブルーノ・モレッティ「#9 ラガッツィ・チェ・ファノ・ムジカ」
衣裳: デニサ・ノヴァ
ステージ・デザイン: オットー・ブベニチェク
照明: ファビオ・アントーチ、イリ・ブベニチェク

出演: ドリアン・グレイ ―― オットー・ブベニチェク
画家バジル・ホールウォード ―― イリ・ブベニチェク
ヘンリー・ウォットン卿 ―― イリ・ブベニチェク
ドリアン・グレイの肖像画 ―― イリ・ブベニチェク
シビル・ヴェイン ―― ラケル・マルティネス

The Picture of Dorian Gray Japan Premiere

“To Otto Bertis”

World Premiere:July 16, 2011 at castle Velké Losiny / Czech Republic

Choreography: Jiří Bubeníček and Otto Bubeníček
Music: Keith Jarrett “October 17,1988” “The Wind”
Bruno Moretti “n°9 Ragazzi che fanno musica”
Costumes: Denisa Nová
Stage Design: Otto Bubeníček
Lighting: Fabio Antoci and Jiří Bubeníček

Cast: *Dorian Gray* ―― Otto Bubeníček
Painter-Basil Hallward ―― Jiří Bubeníček
Lord Henry Wotton ―― Jiří Bubeníček
The Picture of Dorian Gray ―― Jiří Bubeníček
Sibyl Vane ―― Raquél Martínez

「牧神」 日本初演

世界初演: 2012年6月23日 ドレスデン・バレエ

振付: イリ・ブベニチェク
音楽: フランシス・プーランク「ミサ曲 ト長調 5番 アニュス・デイ」
クロード・ドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」
衣裳／ステージ・デザイン: オットー・ブベニチェク
照明: ファビオ・アントーチ、イリ・ブベニチェク

出演: ラファエル・クム=マルケ、ヨン・ヴァイエホ、クラウディオ・カンジアロッシ、
マクシミリアン・ゲノフ、ファビアン・ボランジェ、マイケル・タッカー、
ジャン・オラティンスキー、フランチェスコ・ピオ・リッチ

Faun Japan Premiere

Created for Semperoper Ballett, June 23, 2012

Choreography: Jiří Bubeníček
Music: Francis Poulenc “Mass in G major-5. Agnus Dei”
Claude Debussy “Prelude to the Afternoon of a Faun”
Costume and Stage Design: Otto Bubeníček
Lighting: Fabio Antoci and Jiří Bubeníček

Cast: Raphaël Coumes-Marquet, Jón Vallejo, and Claudio Cangialosi
Maximilian Genov, Fabien Voranger, Michael Tucker,
Jan Oratynski, Francesco Pio Ricci

「プレリュードとフーガ」 世界初演

“Bunkamuraのために”

振付: イリ・ブベニチェク
音楽: ドミートリィ・ショスタコーヴィチ
「24の前奏曲とフーガ 作品87: 第1番 ハ長調、第3番 ト長調、第5番 ニ長調、第4番 ホ短調」
照明: ファビオ・アントーチ、イリ・ブベニチェク

出演: ドロテ・ジルベール、エルヴェ・モロー
ピアノ: 榎本真弓

Preludes & Fugues World Premiere

“For Bunkamura”
Choreography: Jiří Bubeníček
Music:Dmitri Shostakovich
“24 Preluedes and Fugues Op.87: No.1 in C major, No.3 in G major,
No.5 in D major, No.4 in E minor”
Lighting: Fabio Antoci and Jiří Bubeníček

Cast: Dorothée Gilbert and Hervé Moreau
Piano: Mayumi Enomoto

「ル・スフル・ドゥ・レスプリ ―魂のため息―」

“オルガとマリーに捧げる“

世界初演: 2007年9月1日　チューリッヒ・バレエ

振付: イリ・ブベニチェク
音楽: オットー・ブベニチェク「天使の到着」「サイレンス」「天使の出発」
J.S.バッハ「管弦楽組曲第3番 ニ長調 BWV1068より G線上のアリア」
ロマン・ホフシュテッター「弦楽四重奏 ヘ長調 作品3−5番」
ヨハン・パッヘルベル「カノン ニ長調」
衣裳／ステージ・デザイン／映像: オットー・ブベニチェク
照明: ファビオ・アントーチ（オリジナル照明デザイン: マルタン・ゲバー）

出演: イリ・ブベニチェク、オットー・ブベニチェク、ヨン・ヴァイエホ、
ラケル・マルティネス、ドゥオシー・ジュウ、
カテリーナ・マルコフスカヤ、アンナ・メルクロヴァ、
マクシミリアン・ゲノフ、クラウディオ・カンジアロッシ、
マイケル・タッカー、フランチェスコ・ピオ・リッチ

Le Souffle de l’Esprit

“To Olga and Marie”

Created for Zurich Ballet, September 1, 2007

Choreography: Jiří Bubeníček
Music: Otto Bubeníček “Angel’s Arrival”“Silence”“Angel’s Departure”
J.S.Bach “Air-Nr.3 D-Dur BWV.1068”
Roman Hoffstetter “Streichquartett F-Dur, op.3 Nr. 5”
Johann Pachelbel “Canon in D major”
Scenography, Video and Costumes: Otto Bubeníček
Lighting: Fabio Antoci (Original Lighting Design: Martin Gebhardt)

Cast: Jiří Bubeníček, Otto Bubeníček, and Jón Vallejo
Raquél Martínez and Duosi Zhu
Katherina Markowskaja and Anna Merkulova
Maximilian Genov, Claudio Cangialosi,
Michael Tucker, and Francesco Pio Ricci

振付家イリ・ブベニチェクの美意識

「ブベニチェク・ニューイヤーガラ〜カノン〜」上演によせて

文・長野由紀（舞踊評論家）　Text by Yuki Nagano

ハンブルク・バレエのプリンシパルとして活躍していたイリ・ブベニチェクがドレスデンに移籍したのは、2006年のことである。以前から振付にも意欲を示し創作に手を染めるようになっていた彼は、国籍を持つチェコや生まれ故郷のポーランドとの国境にごく近いところにある旧東独の小さな古都で、この頃から見る間に才能を開花させていった。日本では、移籍の直前の2005年夏に東京で行われた「エトワール・ガラ」での『身近な距離』『感情の囚われ人』の2つのパ・ド・ドゥ、次いで2008年の同公演では彼の代表作でもある『ル・スフル・ドゥ・レスプリ―魂のため息―』の最後のパ・ド・トロワが、新作のパ・ド・ドゥ『思いがけない結末』とともに上演されている。

抜粋や小品ではなく、もっと大きな作品を観たいという期待が高まってきたところでお目見えしたのが、2010年に上演された4つの作品である。このたびの“オール・ブベニチェク・プログラム”もその成功が契機となって実現したのではと推察されるのだが、振付家の個性がとてもよくわかるラインナップだったのが、今思い出しても幸運だった。今回の公演の開演を待ちながら、それらの秀作の中から見えてくる彼の作品の魅力をたどってみたい。

まず1月にさいたま芸術劇場で行われた「彩の国バレエ・ガラ　ブベニチェクとドレスデン国立歌劇場バレエ団の俊英たち」で、公演全体の幕を開けた『辿り着かない場所』が、象徴的だった。巨大なスカートのような布に下半身を包まれて上体が抱きあっては解かれる3組のカップルが愛の諸相を暗示する第一の場面から、舞台の前方だけで踊られる3つのパ・ド・ドゥ、一転して大きく開け放った舞台空間を縦横に利用してのアンサンブルの踊りから、冒頭の光景に回帰していく幕切れまで、その手法は変化に富んで、緊張の糸が緩むことがない。この振付家には、ダンサーの身体の表情を巧みに引き出すセンスだけでなく、舞台空間の全体を俯瞰し知的に構築する力量にも並々ならないものがある。そう感じさせるに十分だったのである。

この時上演されたもう一つの作品が、『ル・スフル・ドゥ・レスプリ―魂のため息―』。「別れの言葉を言うことができなかった二人の祖母たちへのオマージュ」と振付家自身の語る作品である。今回も全編が上演される予定の彼の代表作の一つだが、2008年の部分上演の際に用いられた（そして今回の公演の副題でもある）『カノン』というタイトルは、作品の個性を言い得て妙である。同じ動きを規則的に時間をずらしながら反復する、この技法をイリは随所で実に効果的に使っている。単純なものを増幅してゆくことで、そこにはいつしか奥行きが生まれ、観る者の心を一緒に遠くへ運んでゆくような反響が、浮かんで、消えてゆく。音楽には「パッヘルベルのカノン」や「G線上のアリア」他、そして背景にはダ・ヴィンチの絵が投影される。よく知られた芸術作品ならではの、観る者の懐にするりと入り込んでいく力を巧みに用いつつ（というよりもイリは、誰もが耳慣れていながら実は聴いていないこれらの曲の美しさを、心底感じているのに違いない）、下手をすれば通俗やセンチメンタルに転びかねない素材を、素朴な清澄さという、一段高く、宗教的ですらある価値へと昇華させた感があった。

目の前にあるものの一つ先を見通す鋭敏な造形感覚に、絶妙の選曲がからむセンスのよさ、そして個人の経験を感傷を排して作品に昇華できること。『ル・スフル・ドゥ・レスプリ』と同様にこの点を強く感じさせたのが、同年7月の「エトワール・ガラ」での『フラジル・ヴェッセル』だった。音楽はラフマニノフのピアノ協奏曲第2番の2楽章、たいていの振付家なら手に余るのではと想像される名曲だが、イリはその華麗さにも拡がりにも躍らされることなく、繊細かつ緻密に3人のダンサーを動かしてゆく（この恬淡とした姿勢は、もしかするとハンブルク時代に、マーラーやワーグナーにも次々と振り付けるジョン・ノイマイヤーの仕事をつぶさに見てきたからではないかとも思う）。1人と2人、あるいは1人ずつと分かれて踊っている時、それぞれ違う動きであるのにすべてを音楽と調和させる手腕は、まるで手品のようにさりげなく、鮮やかだった。

しかもダンサーたちはゲームのコマとしてではなく役としてそこにいて、2人の男と1人の女の関係は深い情緒的な襞と、それゆえに長い時間の経過をも感じさせる。たとえばアントニー・チューダーが晩年の佳作『葉は色あせて』で描いた、人生の終盤に差しかかった男の若き日の恋の回想のように。これがイリ本人の直近の体験に基づく作品だと後で聞いた時には、改めて胸を打たれる思いだった。創作のためには辛い破局も糧として利用せずにはおかない芸術家の業に、またそれを現実とは別ものとして再構築してみせる明晰さに。そして何より、そこになお透けて見える恋する男の瑞々しい感受性に。

彼はまた、その瞬間に観る者の中でカメラのシャッターが切られたように強烈な印象を残す、絵になる場面の演出にも長けている。『フェリーツェへの手紙』は、同郷のチェコ人作家カフカの人生の一時期をモチーフとし、一編の短編小説のように完結した印象を与える作品である。フェリーツェとは、作家が二度婚約して二度ともそれを破棄するに至った実らぬ恋の相手フェリーツェ・バウアーのことで、二人の間には夥しい数の親書がやりとりされていた。バレエのクライマックスとなったのは、彼女からの一番大切な手紙が赤い封筒で届く場面である。カフカが封を切ると、それは無数の紙吹雪となって指の間からこぼれ落ちていく――不条理を感じさせ、哀しげでユーモラスでもあった作品自体がついにここで涙を落としたかのような深い喪失感を、鮮烈な色彩で焼き付けた。

この作品の音楽はハインリヒ・イグナーツ・フランツ・フォン・ビーバーという17世紀の、これもチェコ生まれの作曲家の「ロザリオのソナタ」よりパッサカリア。イリ独特の陰影の感覚（照明効果による物の見え具合の変化のことではなく、もっと内面的な、感情の起伏や人生の光と影等についての繊細な観察と造形）にぴたりとはまっていて、ポピュラー・クラシックスを使い倒す時の彼とはまた別の、鋭い音楽性を感じたことである。

叶わぬもの、届かぬ思いを描くことは、この作品に限らずイリの旺盛な創作活動の大きな動機なのではないかと想像されるのだが、自ら主演者としてその精髄を表現できるのも、その強みである。量感のある身体と寡黙な男の魅力、あるいは両性具有的な官能性、そして常に高度な舞踊の技術が濃厚な表現になっているところは、他にも誰か例があるだろうか。すぐにはとても思い浮かばない。

しかし最後にひと言付け加えておくならば、イリを語る時、おそらくイリを語っただけでは十分ではないのだろう。『ル・スフル・ドゥ・レスプリ』や今回が日本初演予定の『トッカータ』等の曲を書き、映像や美術も手掛ける双子の兄オットーとの緊密な美意識の共有は、ここでは触れることができなかったが、実に興味深いことの一つである。それぞれが一家を成しながら互いが互いの芸術的半身でもあるというのは、宇宙が二つあるような、余人には窺い知れない感覚なのではなかろうか。ふと、あの『辿り着かない場所』の冒頭の、神秘的な造形が思い出される。オットーは本公演にも参加し、『ドリアン・グレイの肖像』では2人で本人と肖像の中の彼を踊る予定だという。パリ・オペラ座のエトワールであるエルヴェ・モローやドロテ・ジルベールらの華やかな名前とともに、大きな期待をもたらすものである。

文·岡見さえ（舞踊評論家）
Text by Sae Okami

舞踊と音楽の関係性を刷新し、20世紀にバレエの可能性を拡張した振付家はロシアに生まれアメリカで活躍したバランシンだ。身振りで感情を表現して物語を進行する伝統的バレエを脱し、音楽を重視してその複雑な構造を多彩なムーヴメントに変換、視覚化することにより、彼はバレエを純粋芸術に昇華させた。そのバランシンが設立したニューヨーク・シティ・バレエで初演され、称賛を浴びた『トッカータ』は、この偉大な振付家へのブベニチェクのオマージュのようだ。

“トッカータ”とは、17－18世紀前半に流行した技巧的だが構造が自由で即興的要素の強い鍵盤楽器の楽曲形式を指す。意表を突いて沈黙の中から立ち上がるバレエは、万華鏡のごとく切り替わっていく美しいムーヴメントでさまざまな男女の物語を紡ぎだす。やがて響き始めるシンプルで洗練された鍵盤の響き（作曲はオットー・ブベニチェク）とともに、一糸乱れず同調したかと思えば一瞬のずれとともにスリリングに展開する3組の男女のデュオ、あるいは2人の男と1人の女の三角関係を思わせる切ないトリオ、調和した甘やかな男女のパ・ド・ドゥが現れる。思わせぶりな駆け引き、ロマンティックなやりとり、ふと浮かぶ孤独、心にしみる幸福感……。終わらないダンスとともに、愛の諸相が、人生の時間が河のようによどみなく流れ続ける。虚飾を排したダンスからは詩情が香気のように立ち上り、ダンスは抽象的であるゆえさまざまな感情を喚起し、観る者の数だけ物語を生むだろう。

主要デュオを踊るのは、古典の精緻なテクニックとコンテンポラリーな感性を兼ね備えるパリ・オペラ座の2人のエトワール。大輪の花のような華やかさと知的な表情が魅力のジルベール、完璧なラインと憂いを帯びた表情が麗しいモローが、作品にどんな化学変化をもたらすかも楽しみだ。

「トッカータ」 日本初演

“イローナに捧げる”
世界初演: 2009年5月13日　ニューヨーク・シティ・バレエ
振付: イリ・ブベニチェク
音楽・衣裳: オットー・ブベニチェク
照明: ファビオ・アントーチ、イリ・ブベニチェク
出演: ドロテ・ジルベール、カテリーナ・マルコフスカヤ、アンナ・メルクロヴァ
エルヴェ・モロー、ヨン・ヴァイエホ、クラウディオ・カンジアロッシ、マイケル・タッカー

パリでのリハーサルより

©Arnold Gröschel

TOCCATA *“to Ilona”*

Japan Premiere

Created for New York City Ballet, May 13, 2009

Choreography: Jiří Bubeníček
Music: Otto Bubeníček
Costumes: Otto Bubeníček
Lighting: Fabio Antoci and Jiří Bubeníček

Cast: Dorothée Gilbert, Katherina Markowskaja, Anna Merkulova
Hervé Moreau, Jón Vallejo, Claudio Cangialosi, Michael Tucker

©Costin Radu

The Picture *of* Dorian Gray

"to Otto Bertis"

Japan Premiere

World Premiere:July 16, 2011 at castle Velké Losiny / Czech Republic

Choreography: Jiří Bubeníček and Otto Bubeníček
Music: Keith Jarrett "October 17,1988" "The Wind"
Bruno Moretti "n°9 Ragazzi che fanno musica"
Costumes: Denisa Nová
Stage Design: Otto Bubeníček
Lighting: Fabio Antoci and Jiří Bubeníček

Cast: *Dorian Gray* —— Otto Bubeníček
Painter-Basil Hallward —— Jiří Bubeníček
Lord Henry Wotton —— Jiří Bubeníček
The Picture of Dorian Gray —— Jiří Bubeníček
Sibyl Vane —— Raquél Martínez

©Costin Radu

「ドリアン・グレイの肖像」 日本初演

"オットー・ベルティスに捧げる"
世界初演: 2011年7月16日　ヴェルケー・ロシニ城(チェコ共和国)にて

振付: イリ・ブベニチェク、オットー・ブベニチェク
音楽: キース・ジャレット「1988年10月17日」「風」
ブルーノ・モレッティ「#9 ラガッツィ・チェ・ファノ・ムジカ」
衣裳: デニサ・ノヴァ
ステージ・デザイン: オットー・ブベニチェク
照明: ファビオ・アントーチ、イリ・ブベニチェク

出演: ドリアン・グレイ —— オットー・ブベニチェク
画家バジル・ホールウォード —— イリ・ブベニチェク
ヘンリー・ウォットン卿 —— イリ・ブベニチェク
ドリアン・グレイの肖像画 —— イリ・ブベニチェク
シビル・ヴェイン —— ラケル・マルティネス

ブベニチェク作品の特色の一つは、色濃い文学性だ。たとえば「エトワール・ガラ2010」で発表された『フェリーツェへの手紙』は、カフカが結ばれることのなかった婚約者に宛てた500通もの書簡から生まれ、激しい情熱と喪失感の間で揺れる内面のドラマが凄まじい密度のソロダンスとして展開された。

日本初演となる本作は、ヨーロッパ19世紀末の爛熟とデカダンスを描いて比類ない作家オスカー・ワイルドの小説『ドリアン・グレイの肖像』から生まれた。善良な魂、莫大な遺産そして絶世の美貌を持つ青年ドリアン・グレイは、シニカルな人生哲学を語るヘンリー卿にそそのかされ、贅沢な暮らしと漁色にふけり、あらゆる悪徳に身を染める。うぶな婚約者を身勝手な理由で捨て死へと追いやり、友人の画家バジルの忠告を疎んじ刺し殺す。不思議なことにどんなに放蕩を重ねてもドリアンの若さと美貌は衰えないが、彼が罪を犯すごとに、生前にバジルが描いた悪を知らなかった頃のドリアンの肖像画が醜く老いていく。外見が保ち続ける美しさと、内面を映す鏡である肖像画の醜悪さのギャップは広がり続け、ドリアンがそれに耐えられなくなった時、悲劇が起こる……。

このドラマティック・バレエを構成するのはわずか3人。女性1名と、ブベニチェク兄弟のオットーがドリアンを、イリが画家バジル、ヘンリー卿そしてドリアンの分身に姿を変え踊る。秀逸なダンサーであり演技者である兄弟は火花散る迫力のダンスを応酬し、小気味良いテンポで物語を推進する。圧巻は、一卵性双生児のオットーとイリが、ドリアンの二つに引き裂かれた魂を踊るデュオだ。善と悪の間で葛藤する魂の舞踊は、原作小説の持つ魔術的な引力そのままに、抗い難い誘惑とふと蘇る良心の呵責に翻弄されつつ破局へ突き進む人間の心の闇へ、観る者を深く引き込んでいく。

(文・岡見さえ)

©Costin Radu

The Picture of Dorian Gray

©Costin Radu

©Costin Radu

「牧神」 日本初演

世界初演: 2012年6月23日 ドレスデン・バレエ

振付: イリ・ブベニチェク
音楽: フランシス・プーランク「ミサ曲 ト長調 5番 アニュス・デイ」
　　クロード・ドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」
衣裳／ステージ・デザイン: オットー・ブベニチェク
照明: ファビオ・アントーチ、イリ・ブベニチェク

出演: ラファエル・クム=マルケ、ヨン・ヴァイエホ、クラウディオ・カンジアロッシ、
　　マクシミリアン・ゲノフ、ファビアン・ボランジェ、マイケル・タッカー、
　　ジャン・オラティンスキー、フランチェスコ・ピオ・リッチ

©Costin Radu

Faun

Japan Premiere

Created for Semperoper Ballett, June 23, 2012

Choreography: Jiří Bubeníček
Music: Francis Poulenc “Mass in G major-5. Agnus Dei”
　　Claude Debussy “Prelude to the Afternoon of a Faun”
Costume and Stage Design: Otto Bubeníček
Lighting: Fabio Antoci and Jiří Bubeníček

Cast: Raphaël Coumes-Marquet, Jón Vallejo, and Claudio Cangialosi
　　Maximilian Genov, Fabien Voranger, Michael Tucker,
　　Jan Oratynski, Francesco Pio Ricci

牧神とは、ギリシア・ローマ神話の牧畜を守護する半神半獣の神である。地中海の夏の午後、むせるような熱気にまどろむ好色な牧神は、夢とうつつを彷徨い、美しい妖精をその腕に抱かんとする激しい欲望に身を焦がす……。この神話のエピソードをもとにした19世紀フランス象徴派の代表詩人マラルメの詩から、印象主義音楽の泰斗ドビュッシーは「牧神の午後のための前奏曲」を作曲した。1912年に伝説の天才舞踊手ニジンスキーが、この音楽に振り付け、自ら主役の牧神を踊ったのがバレエ『牧神の午後』だ。跳躍も回転もないギリシアの壺絵を思わせる静的で平面的な振付、終幕の牧神の大胆な性的描写は発表当時に一大スキャンダルを巻き起こしたが、時が経つほどにこの斬新な作品の真価は高く評価され、多くの才能ある振付家を刺激し、複数の版を生んでいる。

ブベニチェクの『牧神』は、ニジンスキーの牧神に負けず劣らずスキャンダラスだ。舞台は古代の森から現代の教会へ移されている。背景に光の十字が浮かぶ空間、厳かなプーランクの教会音楽に包まれ聖職者と白い衣の少年たちが不思議な儀式を進行する。そしてあのけだるげなドビュッシーの前奏曲が響き、牧神が現れる。それは禁じられた情熱の目覚めでもある。薔薇色の肌をした驚くほど肉感的なこの牧神は、暗号のようにニジンスキーの振付を織り交ぜつつ妖しく舞い、聖職者の官能をそそり破局へと導いていく。

現実世界で叶わぬゆえに思念の中で常軌を逸して膨れ上がる愛欲とその破局のテーマを、ブベニチェクはニジンスキーの『牧神』が提起していた時代の社会的タブーの概念と戯れながら鮮やかに現代に蘇らせる。秀逸な演技者ぞろいのドレスデン・バレエのダンサーたちが立ち上げる、息詰まるほど濃密なドラマに注目したい。

（文・岡見さえ）

Preludes & Fugues

“for Bunkamura”

World Premiere

本公演のために、新たに振り付けた『プレリュードとフーガ』は、ショスタコーヴィチからインスピレーションを得た作品です。

1950年7月、ショスタコーヴィチは、J.S.バッハの没後200年を記念してライプツィヒで開催された「第1回国際バッハ・コンクール」の審査員に選ばれ、ソ連代表団長として参加しました。そしてこの時出会った、優勝者である若き美しい女性ピアニスト、タチアナ・ニコラーエワの演奏に深い感銘を受けたことがきっかけとなり、「24の前奏曲とフーガ」の作曲に着手します。ショスタコーヴィチはこの全曲初演（1952年12月23日）をニコラーエワに依頼、二人で練習のためにモスクワへ赴いたというエピソードから、今回の振付イメージを着想しました。

本作には特に物語はなく、ヴァリエーションを主体とした構成となっています。パリ・オペラ座のエトワールであるドロテ・ジルベールとエルヴェ・モローという、類い稀な才能を持つ2人のダンサーにインスパイアされながら、私はこの新作パ・ド・ドゥを創り上げていきました。

———— イリ・ブベニチェク

Choreography: Jiří Bubeníček
Music:Dmitri Shostakovich
　“24 Preluedes and Fugues Op.87: No.1 in C major, No.3 in G major,
　No.5 in D major, No.4 in E minor”
Lighting: Fabio Antoci and Jiří Bubeníček

Cast: Dorothée Gilbert and Hervé Moreau
Piano: Mayumi Enomoto

「プレリュードとフーガ」 世界初演

“Bunkamuraのために“

振付: イリ・ブベニチェク
音楽: ドミートリィ・ショスタコーヴィチ
「24の前奏曲とフーガ 作品87: 第1番 ハ長調、第3番 ト長調、第5番 ニ長調、第4番 ホ短調」
照明: ファビオ・アントーチ、イリ・ブベニチェク

出演: ドロテ・ジルベール、エルヴェ・モロー
ピアノ: 榎本真弓

Le Souffle *de* l'Esprit

"to Olga and Marie"

Created for Zurich Ballet, September 1, 2007

Choreography: Jiří Bubeníček
Music: Otto Bubeníček "Angel's Arrival""Silence""Angel's Departure"
J.S.Bach "Air-Nr.3 D-Dur BWV.1068"
Roman Hoffstetter "Streichquartett F-Dur, op.3 Nr.5"
Johann Pachelbel "Canon in D major"
Scenography, Video and Costumes: Otto Bubeníček
Lighting: Fabio Antoci (Original Lighting Design: Martin Gebhardt)

Cast: Jiří Bubeníček, Otto Bubeníček, and Jon Vallejo
Raquél Martínez and Duosi Zhu
Katherina Markowskaja and Anna Merkulova
Maximilian Genov, Claudio Cangialosi,
Michael Tucker, and Francesco Pio Ricci

彩の国さいたま芸術劇場公演より ©池上直哉

Message *from* Manuel Legris

"Le Souffle de l'Ésprit" quel joli titre pour un ballet.
Pari tenu pour Jiří Bubeníček qui signe une œuvre Originale ou la physicaliste et l'esprit ne font qu'un.
Le classicisme de la musique associé à l'inventivité du chorégraphe donne à ce ballet une force particulière.
le trio final est de toute beauté.
Nul doute que ce ballet est déjà une œuvre qui marque et marquera les mémoires.

『ル・スフル・ドゥ・レスプリ』、何と綺麗なバレエのためのタイトルであろう。
イリ・ブベニチェクにとっては、肉体性（身体）と魂（精神）は
一つでしかないという、オリジナルな作品にする賭けであった。
音楽の古典主義が幅広い振付と結ばれ、このバレエに独特の強さを与えている。
最後のトリオの何という美しさか。
このバレエがすでに記憶に残る、残っていくであろう作品であることに何の疑いもない。

―――――――――― マニュエル・ルグリ

「ル・スフル・ドゥ・レスプリ ―魂のため息―」

"オルガとマリーに捧げる"
世界初演: 2007年9月1日　チューリッヒ・バレエ

振付: イリ・ブベニチェク
音楽: オットー・ブベニチェク「天使の到着」「サイレンス」「天使の出発」
J.S.バッハ「管弦楽組曲第3番 ニ長調 BWV1068より G線上のアリア」
ロマン・ホフシュテッター「弦楽四重奏 ヘ長調 作品3−5番」
ヨハン・パッヘルベル「カノン ニ長調」
衣裳／ステージ・デザイン／映像: オットー・ブベニチェク
照明: ファビオ・アントーチ（オリジナル照明デザイン: マルタン・ゲバー）

出演: イリ・ブベニチェク、オットー・ブベニチェク、ヨン・ヴァイエホ、
ラケル・マルティネス、ドゥオシー・ジュウ、
カテリーナ・マルコフスカヤ、アンナ・メルクロヴァ、
マクシミリアン・ゲノフ、クラウディオ・カンジアロッシ、
マイケル・タッカー、フランチェスコ・ピオ・リッチ

彩の国さいたま芸術劇場公演より　©池上直哉

「エトワールガラ2008」で最終パートが『カノン』として初演されて以来、多くのダンスファンに愛される作品が全編上演で蘇る。現代的な感覚と時代を超えた普遍的な美が幸福な邂逅を果たしたこのダンスは、もう一度、そしていつまでも見続けていたいと思わせる独自の魅力をもっている。

優しく微笑む女性を描いたダ・ヴィンチのデッサン、バッハ「G線上のアリア」やパッヘルベル「カノン」など、このバレエにはきっと誰もがすでに目に、耳にした古典芸術の名作が使用されている。だが古典の引用は、シンプル・モダンな装置と衣裳の選択、アブストラクトな美術、オットー作曲の現代音楽とのミックスにより、月並みな印象を与えることなく振付家の独創性を浮かび上がらせる。振付でも、心浮き立つ軽快な跳躍、伸びやかな旋回、細やかなつま先の動き、しなやかに連なる腕や脚のラインなど完成された古典バレエのステップが用いられるが、深淵を覗き込むように低

い位置で展開する緩やかで重厚な動き、いたずらに戯れるような軽い動きがダンスの奥行きを広げている。男性群舞、パ・ド・ドゥ（男女2人の踊り）の扱い方も新鮮だ。

この作品は、公演中だったために最期の別れを告げられなかったブベニチェク兄弟の2人の祖母への思いから生まれたという。ダ・ヴィンチのデッサンは祖母の面影を宿し、作品冒頭とラストパートの3人の男性デュオは彼女らの魂を導く天使の姿に重なり合うと兄弟は語る。二度と会えない人への思い、過ぎた日の幸福の記憶、惜しみなく与えられた無償の愛への感謝。作品に込められたたくさんの愛が、観る者の心を深いところから揺り動かす理由なのかもしれない。だがもちろん、無心に次々と花開くダンスをうっとりと見つめる至福に浸るのもいい。いずれにせよ、大切な、きっと忘れられない作品になるだろう。

（文・岡見さえ）

©Costin Radu

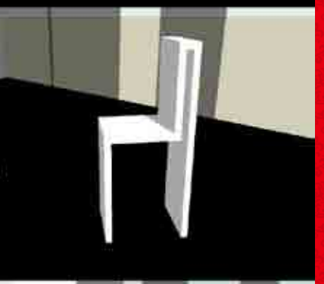
彩の国さいたま芸術劇場公演より　©池上直哉

彩の国さいたま芸術劇場公演より　©池上直哉

Interview with

JIŘÍ BUBENÍČEK

イリ・ブベニチェク



drawing: Otto Bubeníček

兄オットーのアーティスティックなアイディアは作品にとって常に理想的で、私には振付そのものと同様に重要です。

――「ブベニチェク・ニューイヤーガラ～カノン～」は、ご自身が何年もの間、構想を練ってきた新スタイルのガラですが、まずは上演に対する想いをお聞かせください。

自分の芸術性のさまざまな面と同時に、双子の兄オットーとの意義深いコラボレーションを日本の皆さんに見ていただくことができる素晴らしい機会だと思っています。今回のプログラムからもおわかりいただけるように、我々はたくさんの作品を一緒に創作しています。私の振付作品で彼は、衣裳や装置などの視覚的要素、作品によっては音楽もクリエイターとして手掛けているのです。彼のアーティスティックなアイディアは作品にとって常に理想的で、私には振付そのものと同様に重要です。

今回、日本の観客は類い稀なガラ公演を体験することでしょう。皆さんはこれまで数多くのガラをご覧になっているかと思いますが、短編作品をラインナップしたものがほとんどだったのでは。この公演が他に類を見ないと言える最大の理由は、それらとは一線を画したプログラムの構成であること。演目すべてが20～30分のもので、それぞれ独自の空想的世界観とストーリー、あるいはアンビエンス（雰囲気）を持っています。そのアンビエンスをぜひ皆さんに体験していただき、あらゆる体感を共有して絶頂感を分かち合い、そしてまた、スペシャルなダンサーたちの踊りを堪能していただけたらと思ってます。

――ご自身の代表作から世界初演となる新作まで、５つの作品で構成されていますが、演目選定のポイントは？

芸術的な観点から、全く異なる色彩を持った５つのバレエで構成することにしました。それぞれが違う動きのスタイル、質感、感情、物語を持ち、どの作品も独特のアンビエンスを放っています。どれも私にとって特別な作品ですし、ましてや最近創作したものを東京で披露する機会に恵まれたのですから、こんなに幸せなことはありませんよ！

私は振付家として、毎回、必ず前作とは違うものを創ることを自分に課しています。ですから、実際にはすべての作品が私の振付によるものであっても、もし観客の皆さんが５人の振付家の演目を観たように感じてくださったら、それこそ本望ですね。ただ一つ、すべての作品で同じなのは、私の魂だけです。

――それぞれの作品について、ご紹介ください。

『ル・スフル・ドゥ・レスプリ―魂のため息―』はチューリッヒ・バレエでの初演以来、世界中で成功を収めている作品です。米国シャーロットを拠点とするノースカロライナ・ダンス・シアターや、名高いマニュエル・ルグリが率いるウィーン国立バレエのレパートリーにもなっています。東京でもBunkamuraでの「エトワール・ガラ」でこの作品の一部を『カノン』として上演しましたが、今回はこのバレエ全編を、兄オットーの素晴らしい舞台美術と衣裳デザインによるフル・バージョンでお目にかけます。

オットーが作曲し、衣裳をデザインしたニューヨーク・シティ・バレエ初演の『トッカータ』もプログラムに入れました。心の動きを大胆に描いた、美的な調和と研ぎ澄まされた透明感を持つ構成になっています。

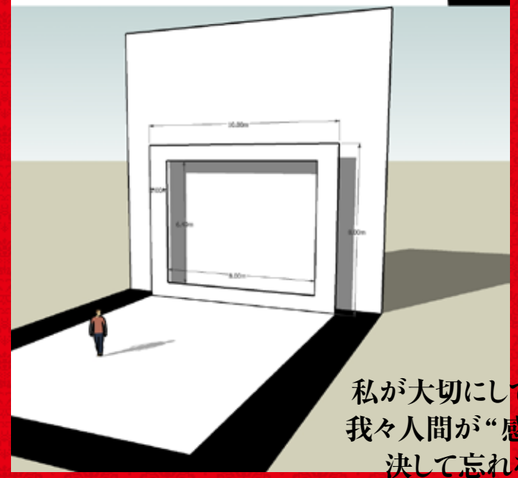
そして、これが世界初演となるショスタコーヴィチ作曲の『プレリュードとフーガ』をお目にかけられることも、とても名誉に感じています。パリ・オペラ座エトワールのドロテ・ジルベールとエルヴェ・モローという類い稀な才能を持つふたりのダンサーと、Bunkamuraのために振り付けたネオ・クラシックの新作パ・ド・ドゥです。

さらに、ストーリー・バレエとしては２つの近作をお届けします。まずは昨年、ドレスデン・バレエのために創作した『牧神』。ニジンスキーの名作に着想を得た私の新バージョンです。全く新しい視点から独創的に物語を展開し、皆さんを秘められた世界へと誘います。その世界は現代のあらゆる問題をはらんでいて、おそらくはかつて信仰された神話も失われた世界です。現代社会の真実を浮き彫りにし、そこに生きることの難しさを表現しました。

そして最後はオスカー・ワイルドの名著『ドリアン・グレイの肖像』。兄と手を携えて創作したコンテンポラリー作品で、我々の芸術観、今日の舞踊、現代の観客に強く訴えるメッセージ、そうしたすべてを融合させた、バレエという芸術のために創った渾身の一作です。

私自身はもちろん、どの作品もすべて自分の子供のような存在ですし、どれも同じだけ愛しています。でも、千秋楽の後で観客の皆さんと一堂に会して、観てどう感じたか、シンプルに話し合えたりしたら面白いでしょうね。いつかそんなことができたら、と思っています。

――出演者も、ご自身とオットー、パリ・オペラ座エトワールのドロテ・ジルベールとエルヴェ・モローをはじめ、世界最高峰の顔触れと言えますが、キャスティングする際に重きを置いたことは？



私が大切にしているのは、我々人間が“感じる”ことを決して忘れないこと。人間が心で“感じる”すべての要素が、振付となっていきます。

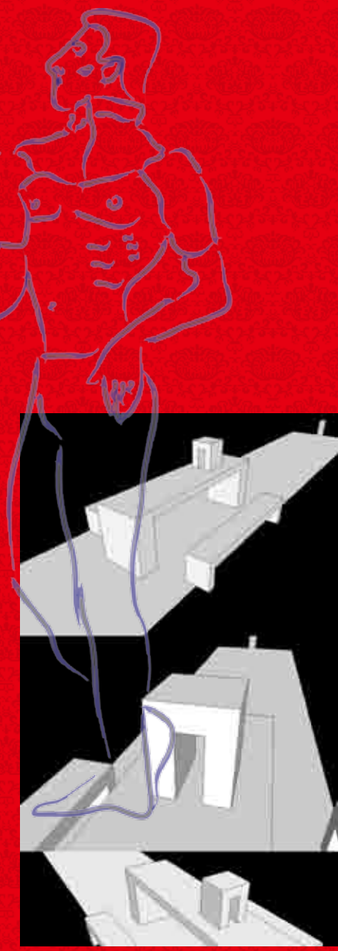
ドロテとエルヴェが私の呼び掛けに応じて参加してくれたことも本当に嬉しいです。圧倒的なダンサーが踊ると、舞踊はここまで素晴らしく美しいものになるのだということを、見せたくなったのです。

役というものは踊り手の人間性、その人個人に合っていなければなりません。例えば『牧神』。主要な役どころの３人（ラファエル・クム＝マルケ、ヨン・ヴァイエホ、クラウディオ・カンジアロッシ）はうってつけのキャスティングだと思ってます。最適の身体の持ち主であるだけでなく、個人の芸術性がこの作品にぴったりなのです。それからドリアン・グレイという役。この役を演じるオットーは圧巻で、他のアーティストが踊ることは想像できません。何といっても、彼のために創られた作品ですから！

また、ドロテとエルヴェが私の呼び掛けに応じて参加してくれたことも本当に嬉しいです。ふたりはエレガントで高度なテクニックに培われた身体性の持ち主。彼らにインスパイアされて新制作の作品を振り付けたいと思いました。素晴らしいアーティストである圧倒的なダンサーが踊ると、舞踊はここまで素晴らしく美しいものになるのだということを、見せたくなったのです。

――ダンサーとしてはもちろん、振付家としても飛躍的な活躍をされていますが、作品を通じて最も伝えたいことは？

私の作品はすべて心の深いところで創作されています。作品づくりの現場で振り付けをしているのは私の魂です。私が大切にしているのは、我々人間が“感じる”ことを決して忘れないこと。愛、恐れ、闘い、そして生きていく中で人間が心で“感じる”すべての要素が、振付となっていきます。人生は困難に満ちているけれど、やはり素晴らしい。人はひとりでは生きていけない。我々が“生”と呼ぶものは我々のものであり、その一瞬一瞬を楽しむために生まれてきたのだ、と。世界へのメッセージを言葉にするなら ――“愛”でしょうね。そして「神は外ではなく、我々の中に存在する」ということです。



©Michel Lidvac

from Dorothée Gilbert

©David Elofer

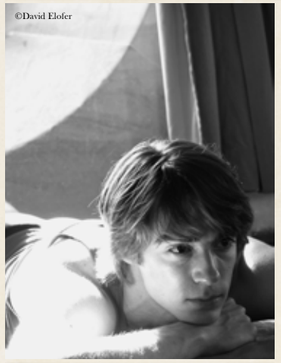
ひとりのダンサーとして、世界ですでに認められている振付家の
芸術的なプロジェクトに参加することは、なんという喜びでしょうか。
振付作品との出会いは、人間との出会いにほかなりません。
振付家の、そして作品への大いなる献身だからです。
私はこのプロジェクトに参加し、日本の皆様へ
この舞台をお贈りできることを嬉しく思っています。
どうぞこの公演を、心から楽しんでください。
私の愛のすべてを込めて。

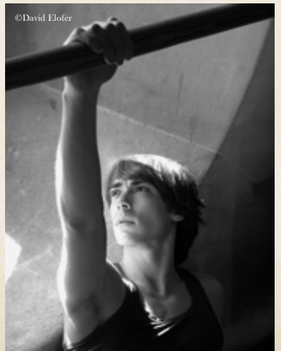
——————— ドロテ・ジルベール

©Icare

©Michel Lidvac

©Kyoko

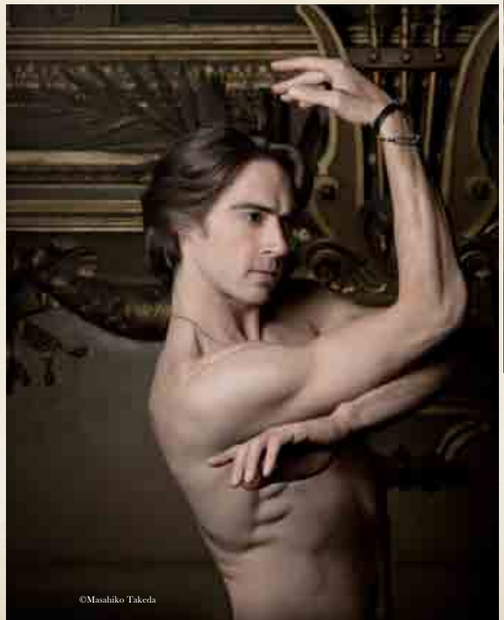

©David Elofer


©David Elofer

©David Elofer

©Anne Deniau

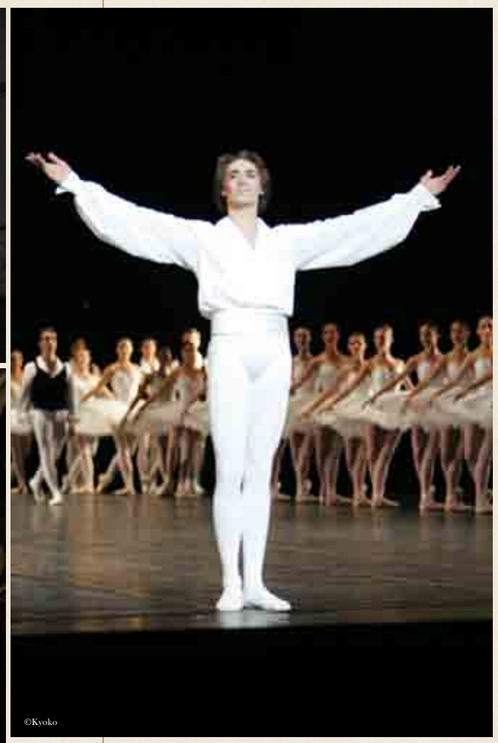
©David Elofer


©Masahiko Takeda

from Hervé Moreau

この6年という長く失われた年月を経て、日本で再び踊るということが、
私にとってどれほど意味あることか、
そしてそれが叶うことに、いかに喜びを感じていることか——。
このガラ公演は、イリとオットーという、私が尊敬してやまない
アーティストの作品だけで構成されたプログラムを
皆様にご覧いただけるまたとない機会です。
同時に、私の最も愛するパートナーであり、
長い間、共に踊ることができなかったドロテ・ジルベールと
再び同じ舞台に立つという、この上ない幸せをも、私にもたらしてくれました。
この公演を機に、皆様と再会できることを心から感謝します。
愛をこめて。

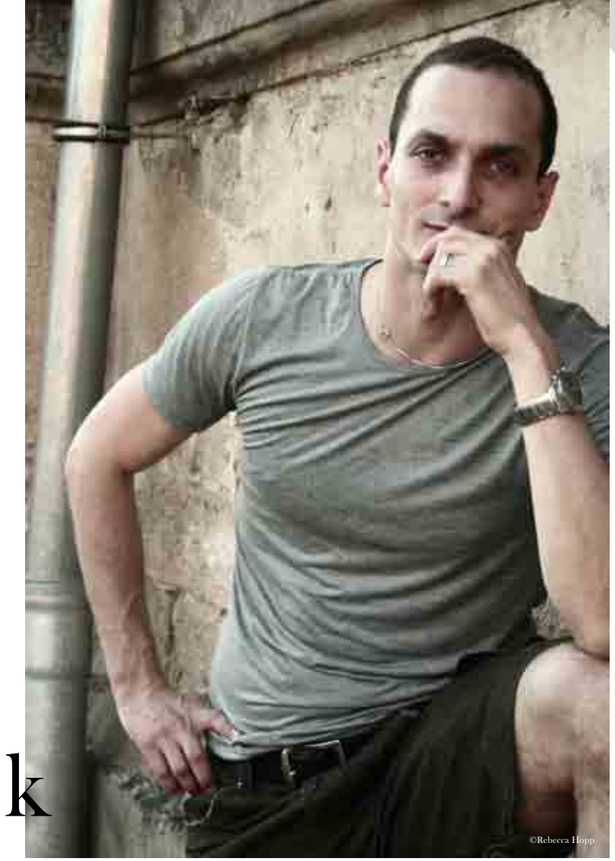
——————— エルヴェ・モロー


©Kyoko

©Francette Levieux

©Icare

©Icare

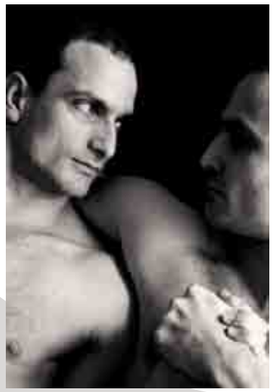


Jiří Bubeníček

イリ・ブベニチェク

ドレスデン・バレエ　プリンシパル
振付家

ポーランド生まれ、チェコ国籍。プラハ音楽院でバレエを学び、1992年ローザンヌ国際バレエ・コンクールでキャッシュプライズ賞を受賞。93年ハンブルク・バレエ入団。97年プリンシパル。『椿姫』『冬の旅』『ニジンスキー』等、ノイマイヤー作品で主役を踊るほか、バランシン、エック、ラコット、アシュトン等の作品を踊る。2002年『椿姫』のアルマン役でブノワ賞を受賞。06年ドレスデン・バレエにプリンシパルとして移籍。99年のウィーン・ニューイヤー・コンサートをはじめ海外のガラ、フェスティバルからの招聘も多く、06年にはパリ・オペラ座バレエの『椿姫』でアニエス・ルテステュと、10年にはオーレリー・デュポンとの共演でアルマンを踊っている。日本にはハンブルク・バレエ公演のほか、「世界バレエフェスティバル」(00年)、「エトワール・ガラ」(05、08、10年)、自身のグループ公演(05、06、10年)等で来日。
フリーランスの振付家として、05年ハンブルク・バレエに『辿り着かない場所』、07年チューリッヒ・バレエに『ル・スフル・ドゥ・レスプリ―魂のため息―』、09年ニューヨーク・シティ・バレエに『トッカータ』、10年中国国立バレエに『OUTRENOIR』、12年にはマリインスキー・バレエに『ジェントル・メモリーズ』、ドレスデン・バレエに『牧神』を振付。『ル・スフル～』はウィーン国立バレエ、ノースカロライナ・ダンス・シアターでも上演されているほか、12年には英国ロイヤル・バレエ学校のレパートリーとなった。
02年ヴァルナ国際バレエ・コンクールで『Made in Earth』の振付により2位、第18回ハノーヴァー国際振付コンクールで『Prisoners of Feeling』がオーディエンス賞を受賞。12年にはオットーと共に国際アワードのダンス・オープンでベスト・デュエット賞に選ばれた。
また、ブベニチェク兄弟として、09年より『ブベニチェクとフレンズ』、11年より『ブベニチェクの世界』公演を、ダンサーおよび振付：イリ、衣裳／美術デザイン／音楽：オットーで主催し、世界ツアーを実施。2011年5月にはドイツの主要バレエ団のプリンシパルと共に、ドレスデンのアルベルティヌム美術館で東北大震災サポート・チャリティ公演「バレエ・フォー・ジャパン」を開催。
舞台以外では、ドーニャ・フォイヤー監督のドキュメンタリー映画『ワーキング・オブ・パラダイス』で踊り、ノイマイヤーのDVD『幻想―「白鳥の湖」のように』、『ヴェニスに死す』に出演。05年にはTV局 ARTEにより双子の兄オットーとのドキュメンタリー・フィルム「Die Ballett-Zwillinge (The Ballet Twins)」が制作された。



©Rebecca Hopp

Otto Bubeníček

オットー・ブベニチェク

ハンブルク・バレエ　プリンシパル
作曲家／デザイナー

ポーランド生まれ、チェコ国籍。プラハ音楽院でバレエを学び、1992年ローザンヌ国際バレエ・コンクールでキャッシュプライズ賞を受賞。93年ハンブルク・バレエ入団。97年プリンシパル。『オデュッセイア』『シェエラザードIII』『かもめ』『冬の旅』『ニジンスキー』『人魚姫』等、ノイマイヤー作品の主役または主要キャラクターを踊るほか、バランシン、エック、ラコット、アシュトン等の作品を踊る。コペンハーゲン、ロンドン、リヨンなど、海外のガラ、フェスティバルからの招聘も多く、日本にはハンブルク・バレエ公演のほか「世界バレエフェスティバル」(00年)、自身のグループ公演(05、06、10年)等で来日している。
ダンサー以外での活動も幅広く、フリーランスの作曲家、デザイナー、ビデオクリップや短編映画の監督としても活躍。作曲家としてはダンスや映画のための楽曲を手掛け、それらはハンブルク国立歌劇場、パリ・オペラ座、ドレスデン国立歌劇場等で使用されている。
また、双子の弟イリ・ブベニチェクのバレエ作品『辿り着かない場所』『ル・スフル・ドゥ・レスプリ―魂のため息―』『トッカータ』では音楽／衣裳／美術デザイン等を担当している。
09年イタリアのダンツァ&ダンツァ賞、「TANZ」誌のベスト・ダンサー賞受賞。12年には国際アワードのダンス・オープンでイリと共にベスト・デュエット賞に選ばれた。最近では“ファウスト”演劇アワードの演技／ダンスパフォーマンス部門にノミネートされている。

©Rebecca Hopp

©Rebecca Hopp

Dorothée Gilbert

ドロテ・ジルベール

パリ・オペラ座バレエ　エトワール

© 細野晋司

フランス、トゥールーズ生まれ。90年よりトゥールーズのコンセルヴァトワールで学び、95年パリ・オペラ座バレエ学校に入学。バレエ学校公演のほかにも、オペラ座でソリストとして『ヨンダリング』『ギリシャの踊り』『火の鳥』などを踊る。2000年、パリ・オペラ座バレエ団に入団。02年コリフェに昇格、03年AROP賞受賞、同年スジェに昇格。04年カルポー賞を受賞。05年プルミエール・ダンスーズに昇格。2007年11月19日、『くるみ割り人形』上演後にエトワールに任命される。

美しい容姿、正確なテクニックを持ち、強靭な身体に恵まれたジルベールは、パリ・オペラ座の新時代を担うスターとして待ち望まれたバレリーナである。主なレパートリー：ラコット『パキータ』、ヌレエフ『ラ・バヤデール』『ドン・キホーテ』『くるみ割り人形』『ライモンダ』『眠れる森の美女』などクラシック作品。アシュトン『ラ・フィーユ・マル・ガルデ』、バランシン『ジュエルズ』、バール『ジゼル』、プティ『プルースト―失われた時を求めて』、リファール『白の組曲』、クランコ『オネーギン』、ノイマイヤー『マーラー交響曲第3番』、マクレガー『ジェニュス』など。世界各地のガラ、フェスティバルへの招聘も多く、日本では02、04、07年の「ルグリと輝ける仲間たち」、「エトワール・ガラ2010」「Love From Parisエトワール」などに出演している。

2006年レオニード・マシーン賞、2006年バレエ2000賞を受賞。2012年よりレペットの広告に出演。2012年3月、DVD「ドロテ・ジルベール パリ・オペラ座エトワールのバレエ・レッスン」発売。オペラ座のDVDとしては、『椿姫』『コッペリア』『ドガの踊り子』『カルメン』に出演。

2012年1月には、東日本大震災で被災した子供たちのために、オペラ座の仲間と仙台、石巻でバレエクラスを行った。

©Michel Lidvac

©Michel Lidvac

©Masahiko Takeda

Hervé Moreau

エルヴェ・モロー

パリ・オペラ座バレエ エトワール

フランス、ボルドー生まれ。1989年、パリ・オペラ座バレエ学校入学。95年、オペラ座バレエ団に入団。98年、「若いダンサーの夕べ」公演で初めて『白鳥の湖』の王子を踊る。99年コリフェ、2001年スジェに昇格。クラシック作品以外にもキリアン、ノイマイヤー、プティ作品の主役を踊る。02年プルミエ・ダンスールに昇格。06年3月3日、『ラ・バヤデール』上演後にエトワールに任命される。09年より怪我で休養していたが、12年5月、サシャ・ヴァルツの『ロミオとジュリエット』公演でオーレリー・デュポンと共演し復帰した。

白い王子役は彼のためにあるかのような美しく優雅な容姿を持ち、確かなテクニックでクラシックからコンテンポラリーまで多くの作品の主役を踊る、現在のオペラ座を代表するダンスール・ノーブルである。主なレパートリー：バランシン『ジュエルズ』のダイアモンドとエメラルド、コラーリ&ペロー『ジゼル』、ベジャール『第九交響曲』、フォーサイス『イン・ザ・ミドル・サムホワット・エレヴェイテッド』『アプロクシメイト・ソナタ』、グリゴーヴィチ『イワン雷帝』、キリアン『ベラ・フィギュラ』、リファール『白の組曲』、ノイマイヤー『シルヴィア』『椿姫』『マーラー交響曲第3番』、ヌレエフ『ラ・バヤデール』『ドン・キホーテ』『白鳥の湖』『ロミオとジュリエット』『ライモンダ』、プティ『ノートルダム・ド・パリ』『プルースト―失われた時を求めて』、ロビンス『牧神の午後』、クランコ『オネーギン』など。

パートナーからの信頼も厚く、05年の『ロミオとジュリエット』ではオーレリー・デュポンと踊り、劇場を沸かせた。06年のブノワ賞受賞に繋がった、アニエス・ルテステュとの共演によるノイマイヤー振付『椿姫』アルマン役での感情表現は高い評価を得、新境地を開拓。08年にはマニュエル・ルグリの引退公演『オネーギン』でイザベル・シアラヴォラと共演、彼女のエトワール昇進のパートナーを務めた。

日本にはバレエ学校、バレエ団の公演のほか、02 年の「ルグリと輝ける仲間たち」、「エトワール・ガラ2005」で来日している。

2002年AROP賞、2006年ブノワ賞受賞。映画「伝説のマルコワ」に出演。

©Michel Lidvac

©Sebastien Mathé

Raphaël Coumes-Marquet
ラファエル・クム=マルケ

ドレスデン・バレエ　プリンシパル

フランス、ブザンソン生まれ。パリ・オペラ座バレエ学校にてバレエを学ぶ。ウィーン国立バレエ、モンテカルロ・バレエを経て、1998年オランダ国立バレエに入団、2002年ソリストに昇格。06年ドレスデン・バレエ入団。主なレパートリー：『白鳥の湖』『眠れる森の美女』『くるみ割り人形』『ラ・シルフィード』『オネーギン』、クランコ『じゃじゃ馬馴らし』、ノイマイヤー『幻想―「白鳥の湖」のように』『真夏の夜の夢』、バランシン『ダイアモンド』『アポロ』『フー・ケアーズ?』『セレナーデ』『アゴン』『四つの気質』『シンフォニー・イン・C』、ドゥアト『ドゥエンデ』、キリアン『小さな死』、フォーサイス『エネミー・イン・ザ・フィギュア』『アーティファクト』『ステップテクスト』『イン・ザ・ミドル・サムホワット・エレヴェイテッド』ほか、ショルツ、カールソン、インガー、ドーソン作品など。アメリカ、カナダ、オーストラリア、日本など各国のフェスティバル、ガラ公演に出演。映像では04年ドーソンの「ザ・グレイ・エリア・イン・クリエーション」、オランダ国立バレエの『眠れる森の美女』、08年『ジゼル』（ドーソン振付）などに出演。95年「ダンスマガジン」誌のベスト・ヤング・ダンサーに選ばれ、09年ベスト・パートナー賞を受賞。

©Rebecca Hopp

Katherina Markowskaja
カテリーナ・マルコフスカヤ

元ドレスデン・バレエ　プリンシパル／インターナショナル・ゲスト

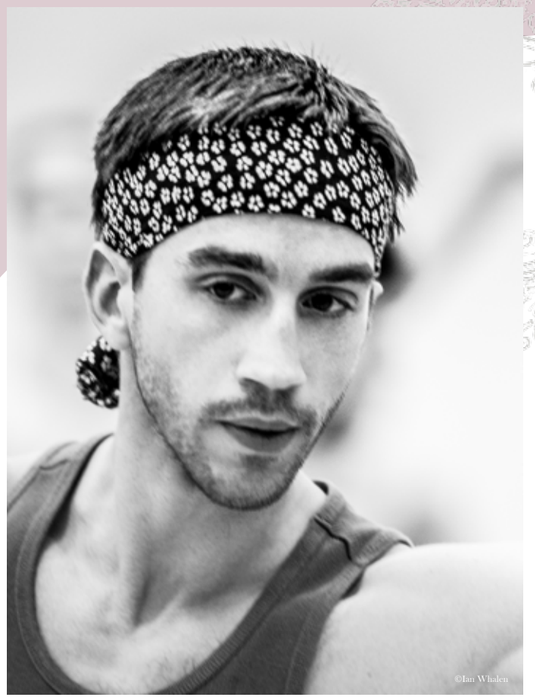
ウクライナ、キエフ生まれ。キエフ国立バレエ学校、ハインツ・ボスル財団ミュンヘン・バレエ・アカデミーにてバレエを学ぶ。1996年ドレスデン・バレエに入団、2010年より同バレエ団のインターナショナル・ゲストおよびフリーランス・ダンサー。99年マリー・ヴィグマン賞受賞。主なレパートリー：『ドン・キホーテ』のキトリ、『白鳥の湖』のオデット／オディール、『眠れる森の美女』のオーロラ姫、『ラ・バヤデール』のニキヤ、『ラ・フィーユ・マル・ガルデ』のリーズ、フォーキン『ペトルーシュカ』、バランシン『タランテラ』『テーマとヴァリエーション』『ルビーズ』、クランコ『じゃじゃ馬馴らし』、ノイマイヤー『幻想―「白鳥の湖」のように』『真夏の夜の夢』『お気に召すまま』『ダフニスとクロエ』『春の祭典』『くるみ割り人形』の主役、ワシーリエフ『パガニーニ』、シリング『エレクティヴ・アフィニティーズ』、フォーサイス『イン・ザ・ミドル・サムホワット・エレヴェイテッド』『精密の不安定なスリル』『エネミー・イン・ザ・フィギュア』、キリアン『6つの踊り』『ヌアージュ』ほか、ショルツ、ドーソン、ビゴンゼッティ、インガー作品など。映像では08年『ジゼル』（ドーソン振付）に出演。

Anna Merkulova
アンナ・メルクロヴァ

ドレスデン・バレエ　ファースト・ソリスト

ウクライナ、ドネツィク生まれ。ドネツィク・コレオグラフィック・スクールにてバレエを学ぶ。ドネツィク州立オペラバレエ・アカデミー、フェッテ・ユース・バレエ、ダンス・アライブ、ベイ・エリア・ヒューストン・バレエ・シアター、チボリ・パントマイム・シアターを経て、2006年ドレスデン・バレエに入団、08年コリフェ、セカンド・ソリスト、12年ファースト・ソリストに昇格。1994年ウクライナのハルキフ国際バレエ・コンクール第2位、98年世界バレエ&モダンダンス・コンクール ファイナリスト。主なレパートリー：ワトキン『白鳥の湖』のナポリの王女、『眠れる森の美女』のフェアリー、『ラ・バヤデール』、『くるみ割り人形』のマリー、バランシン『テーマとヴァリエーション』『コッペリア』『ジュエルズ』、クランコ『じゃじゃ馬馴らし』、ノイマイヤー『くるみ割り人形』、キリアン『6つの踊り』、フォーサイス『エネミー・イン・ザ・フィギュア』『アーティファクト』、トゥーザー『No Thumb』、インガー『エンプティ・ハウス』など。映像では08年『ジゼル』（ドーソン振付）、11年『くるみ割り人形』に出演。

©Rebecca Hopp


©Ian Whalen

Maximilian Genov
マクシミリアン・ゲノフ

ドレスデン・バレエ　ファースト・ソリスト

ポーランド、ワルシャワ生まれ。オーストリア国籍。ワガノワ・バレエ・アカデミー、ウィーン国立バレエ学校にてバレエを学ぶ。キーロフ・バレエ、ウィーン国立バレエ、オランダ国立バレエを経て、2006年ドレスデン・バレエ入団。09年セカンド・ソリスト、10年よりファースト・ソリスト。1996年ウィーンOTRコンテスト第1位。97年ブラジリア国際バレエ&モダン・ダンスコンクール金賞。99年ローザンヌ国際バレエ・コンクール ファイナリスト。03年、“Il tempo di Roma”特別賞を受賞。主なレパートリー：『眠れる森の美女』『くるみ割り人形』『ジゼル』、クランコ『じゃじゃ馬馴らし』『ラ・バヤデール』、プティ『カルメン』、ノイマイヤー『真夏の夜の夢』『幻想―「白鳥の湖」のように』『お気に召すまま』、ロビンス『イン・ザ・ナイト』、バランシン『ルビーズ』『フー・ケアーズ?』『シンフォニー・イン C』『テーマとヴァリエーション』、プレルジョカージュ『ル・パルク』ほか、ショルツ、キリアン、フォーサイス、ブルマション、インガーの作品など。初演キャストとしてドーソン『ジゼル』、ワトキン『白鳥の湖』に出演。映像では07年『眠れる森の美女』、08年『ジゼル』（ドーソン振付）に出演。

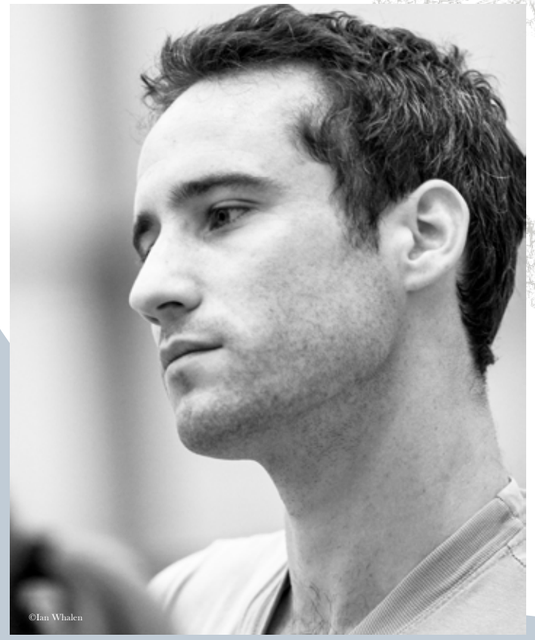
©Ian Whalen

Jón Vallejo
ヨン・ヴァイエホ

ドレスデン・バレエ　ファースト・ソリスト

スペイン、サン・セバスチャン生まれ。同地のタリア・メントス・メデル、マドリッドのカルメン・ロッシュ・バレエ学校にてバレエを学ぶ。カルメン・ロッシュ・バレエ、スペイン国立ダンスカンパニーを経て、2006年ドレスデン・バレエに入団。08年セカンド・ソリスト、11年ファースト・ソリストに昇格。09年「ダンス・ヨーロッパ」誌で男性ダンサー部門の最優秀ダンス賞受賞。主なレパートリー：キリアン『小さな死』『6つの踊り』、フォーサイス『エネミー・イン・ザ・フィギュア』『イン・ザ・ミドル・サムホワット・エレヴェイテッド』、デュアト『レマンゾ』『アレナル』『アローン・フォー・ア・セカンド』『ナ・フローレスタ』『El amoroso』、ファーブル『Violin Dingres』、ノイマイヤー『真夏の夜の夢』など。初演キャストとして、トゥーゾー『ロミオとジュリエット』のロミオ、『くるみ割り人形』、ドゥーダ、モンテロ、ロドリゲスの作品に出演。07年マドリッド・バレエ・フェスティバルをはじめ、各国のガラ公演、フェスティバルに出演している。振付助手としてはチューリッヒ・バレエの『ル・スフル・ドゥ・レスプリ』に参加。映像では08年『ジゼル』（ドーソン振付）に出演。

「ル・スフル・ドゥ・レスプリ―魂のため息―」©Costin Radu


©Ian Whalen

Fabien Voranger
ファビアン・ボランジェ

ドレスデン・バレエ　ファースト・ソリスト

フランス、エクス・アン・プロバンス生まれ。パリ・オペラ座バレエ学校、マルセイユ・バレエ・スタジオを経て、英国ロイヤル・バレエ学校にてバレエを学ぶ。マルセイユ国立バレエ、ベルリン・ドイツ・オペラ、ウィーン国立バレエを経て、2006年ドレスデン・バレエに入団。08年よりファースト・ソリスト。1997年、ローザンヌ国際バレエ・コンクールでローザンヌ賞／エスポワール賞受賞。主なレパートリー：『ロミオとジュリエット』『コッペリア』『スパルタクス』『眠れる森の美女』、ノイマイヤー『真夏の夜の夢』『くるみ割り人形』『幻想―「白鳥の湖」のように』『お気に召すまま』、ロビンス『イン・ザ・ナイト』、クランコ『じゃじゃ馬馴らし』、バランシン『ダイアモンド』『テーマとヴァリエーション』ほか、ショルツ、キリアン、プレルジョカージュ、フォーサイス、ブベニチェク作品など。初演キャストとしてはゴダーニ『Spazio-Tempo』。映像では08年『ジゼル』（ドーソン振付）に出演。日本、イタリア、フランスなどの国際フェスティバル、ガラ公演に出演している。

Claudio Cangialosi
クラウディオ・カンジアロッシ

ドレスデン・バレエ　セカンド・ソリスト

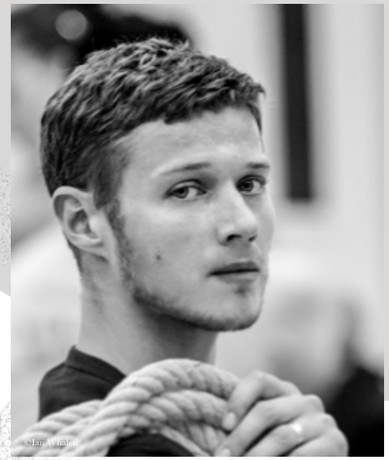
イタリア、パルティニーコ生まれ。ミラノ・スカラ座バレエ学校で学ぶ。2006年ドレスデン・バレエに入団、2010年よりセカンド・ソリスト。09年「ダンス・ヨーロッパ」誌で男性ダンサー部門の最優秀ダンス賞。主なレパートリー：『眠れる森の美女』の宝石、『ラ・バヤデール』のゴールデン・アイドル、『ライモンダ』の王子、『くるみ割り人形』『パキータ』『海賊』『ジゼル』『ペトルーシュカ』、バランシン『テーマとヴァリエーション』、クランコ『じゃじゃ馬馴らし』、ノイマイヤー『真夏の夜の夢』『幻想―「白鳥の湖」のように』、フォーサイス『エネミー・イン・ザ・フィギュア』『ステップテクスト』、キリアン『6つの踊り』『シンフォニエッタ』ほか、ドーソン、スポエルリ、ブベニチェク、インガー作品など。映像では08年『ジゼル』（ドーソン振付）に出演。

©Rebecca Hopp

Raquél Martínez
ラケル・マルティネス

ドレスデン・バレエ　コリフェ

スペイン、ムルシア生まれ。ムルシア・ダンス・コンセルヴァトワール、ヴィクトル・ウラテ・ダンス・センター、マドリッドのカルメン・ロッシュ学校でバレエを学ぶ。2006年、カルメン・ロッシュ・バレエから、ドレスデン・バレエに入団。2010年コリフェに昇格。主なレパートリー：バランシン、クランコ、ノイマイヤー、フォーサイス、キリアン、インガー、ロドリゲス、トゥーブウ、ドーソン、ワトキンらの振付作品。トゥーブウの『ロミオとジュリエット』『くるみ割り人形』などの初演キャストにも選ばれている。



Jan Oratynski
ジャン・オラティンスキー

ドレスデン・バレエ　コール・ド・バレエ

ロシア、チェリャビンスク生まれ。ドイツ国籍。ドイツのライン・オペラ、ボリショイ・バレエ学校、ジョン・クランコ・バレエ・スクールを経てアントワープ王立バレエ学校にてバレエを学ぶ。ベルギーのフランダース・バレエを経て、2004年ドレスデン・バレエに入団。

Duosi Zhu
ドゥオシー・ジュウ

ドレスデン・バレエ　コリフェ

中国、河南省生まれ。河南中国芸術学院、北京ダンス・アカデミー、チューリッヒ・バレエ学校でバレエを学ぶ。上海バレエ、チューリッヒ・ジュニアバレエ、チューリッヒ・バレエを経て、2007年、ドレスデン・バレエに入団。主なレパートリー：『眠れる森の美女』の美の精／サファイアの精／オーロラ、『パキータ』『コッペリア』『海賊』のヴァリエーション、『ラ・バヤデール』の第3ソリスト、『くるみ割り人形』のスペインの踊り、バランシン『テーマとヴァリエーション』『ルビーズ』、ノイマイヤー『幻想―「白鳥の湖」のように』の4羽の白鳥、クランコ『じゃじゃ馬馴らし』、フォーサイス『イン・ザ・ミドル・サムホワット・エレヴェイテッド』、ドーソン『ザ・ディスアピアード』『レヴェランス』『ジゼル』ほか、スポエルリ、インガー、ブペニチェク作品など。

Francesco Pio Ricci
フランチェスコ・ピオ・リッチ

ドレスデン・バレエ　コール・ド・バレエ

イタリア、サン・ジョヴァンニ・ロトンド生まれ。ミラノ・スカラ座バレエ学校にて学ぶ。ミラノ・スカラ座バレエを経て、2011年ドレスデン・バレエに入団。

Michael Tucker
マイケル・タッカー

ドレスデン・バレエ　コリフェ

アメリカ、オースティン生まれ。オースティン・バレエ、スクール・オブ・アメリカン・バレエ、ニューヨーク・コレオグラフィック・インスティテュート、パルッカ・シューレ・ドレスデンで学ぶ。ニューヨーク・シティ・バレエを経て、2010年、ドレスデン・バレエに入団、2012年コリフェに昇格。2008年“Mae L. Wien”奨励賞受賞。

Piano

Mayumi Enomoto
榎本真弓　ピアニスト

武蔵野音楽大学卒業。遠藤道子、丸山徹薫、M.シュタインに師事。卒業後、バレエ・ピアニストとして活動を始める。ゆう企画主催のセミナーにてMusicality Classの講師を務め、ローザンヌ国際バレエ・コンクール元審査委員長ヤン・ヌイッツより高い評価を受ける。2009年、文化庁在外研修員としてウィーン国立歌劇場、オランダ王立コンセルヴァトワールにて研鑽を積む。2002～05年、熊川哲也Kバレエ カンパニーおよび同スクール主任ピアニスト。2006年、NHK教育番組「からだであそぼ」バレエ入門の伴奏を担当。現在、アーキタンツ、岡本佳津子スペシャルクラス、バレエシャンブルウエスト、Angel-R等を中心に、バレエスクール、講習会、リハーサル、著名ダンサーの来日公演のピアニストとして活躍中。12年には「エトワール～フランス・バレエのエレガンス～」でバランシン振付／ラヴェル音楽「ソナチネ」を演奏、ドロテ・ジルベール、フロリアン・マニュネ等と共演。

©Rebecca Hopp

©Costin Radu

BUBENÍČEK
NEW YEAR GALA
Canon

「ドリアン・グレイの肖像」 ©Costin Radu

主催 Bunkamura／TBS
協賛 高砂熱学工業株式会社 Takasago Thermal Engineering Co.,Ltd.
企画協力 ベルチェアソシエイツ
オフィシャルエアライン ANA

Staff

照明監督　ファビオ・アントーチ　Fabio Antoci
ステージマネージャー　ドミニク・ストロブル　Dominik Strobl

舞台監督　黒澤一臣 (OSK)
　　市川太也 (OSK)
大道具　清水重光 (ステージセキヤ)
照明　本江加奈 (舞台照明劇光社)
音響　宮下 章 (サウンド・メソッド)
映像　中野一幸 (アルゴン社)
衣裳　渡辺 領 (グループ色)
ヘア・メイク 見目智代
レッスンティーチャー　林かおり
レッスンピアニスト　真家香代子
通訳　柴田綾子　天沼蓉子
舞台機構　村上栄一 (村上舞台機構)
舞台装置・小道具　延島泰彦 (東宝舞台)
輸送　山田実雄 (フォーバル)
ホール舞台技術　内田宏 (Bunkamura) / 野中昭二 (Bunkamura)
舞台協力　渋谷ステージセンター
宣伝物デザイン　柳沼博雅 (GOAT)
CM 製作　堀田明宏　阿武敦子 (堀田明宏事務所)

企画協力　度会輪子 (ベルチェアソシエイツ)
協力　Repetto

エクゼクティブ・プロデューサー　小副川龍次 (Bunkamura) / 岩原貞雄 (TBS)
ゼネラル・プロデューサー　加藤真規 (Bunkamura) / 高橋一世 (TBS)
チーフ・プロデューサー　松井珠美 (Bunkamura)
プロデューサー　田口 紅 (Bunkamura) / 樑本憲勝 (TBS)

票券　岡野昌恵 (Bunkamura) / 上野景子 (TBS)
団体販売　加藤雅拡 (Bunkamura) / 小平澄子 (Bunkamura)
　　道下広次 (Bunkamura) / 神田浩興 (Bunkamura)

Special Thanks 佐藤まいみ、彩の国さいたま芸術劇場、
岡見さえ、藤本真由、長野由紀、㈱ビデオスタッフ、木下 裕、鳥越香代子、鈴木なお、
合同会社テント、吉永 希、佐々木恵枝、Athénais DAH DAH (順不同)

Special Thanks to Aaron Watkin, John Neumeier, Bridget Lefèvre, Manuel Legris, Flavia Bäbler, Fabio Antoci, Dominik Strobl and all the dancers. Without them this show could never happen.
And, very special thanks to my brother for all his artistry, especially for his never ending support and love!
——— Jiří Bubeníček

PROGRAM　発行日：2013 年 1 月 5 日　発行：Bunkamura　編集：石井三保子　デザイン：GOAT　印刷：有限会社 アベ印刷